平成 29 年（2017 年）2 月 3 日発行

長野県の埋蔵文化財情報誌

ひんご遺跡出土縄文中期土器

信州の遺跡

第10号

最新調査成果から 1

縄文後期集落跡と火焔型土器　栄村　ひんご遺跡

上段：調査区全景（東から）手前左は縄文後期前葉の敷石住居跡
左下：縄文後期前葉の敷石住居跡　右下：王冠型土器出土状況

ひんご遺跡は標高 284m 前後の、千曲川に傾斜した左岸段丘にある。平成 27・28 年度で東西延長約 120m の縄文時代集落跡の長軸方向を調査した。上層には多量の炭化物を含む後期前葉主体の遺物包含層が堆積する。28 年度の主な遺構は、堀之内 1・2 式期の竪穴住居・敷石住居跡 8 軒、配石墓 1 基と土坑 241 基である。土坑とした穴には、根固め石を詰めた柱穴で構成される掘立柱建物跡がいくつか含まれているものと推定される。中期中葉の遺構は貯蔵穴 1 基であったが、「火焔型」・「王冠型」土器を含む新潟県に主体的に分布する土器が多量に出土した。（長野県埋蔵文化財センター　締田 弘実）

最新調査成果から2

割れたオオツノジカの骨　信濃町 立が鼻遺跡

螺旋状の割れ口をもつヤベオオツノジカ
上腕骨の骨片（右側２点が接合する）

調査風景

野尻湖底の立が鼻遺跡では、旧石器時代のナウマンゾウ狩りの証拠を集めることなどを目的に昭和 37 年から定期的に発掘が行われている。

21 回目となった 2016 年３月の発掘では考古資料 15 点、哺乳類化石 45 点などが得られた。約 4.3 万年前の地層から出土したヤベオオツノジカの上腕骨は螺旋状の割れ口をもつ接合資料で、骨が生の状態の時に打撃されて割れたと考えられ、ヒトが割った可能性を示唆する好資料である。（野尻湖発掘調査団　渡辺 哲也）

最新調査成果から3

天竜川とともに生きた縄文人のムラ　飯田市 川原遺跡

天竜川に向かって延びた微高地上に、縄文時代中・後・晩期の竪穴住居跡が 10 軒発見された。後・晩期の住居跡は、出土例が少ない貴重な事例である。ほとんどの住居跡から、石錘（網のおもり）が出土した。天竜川のほとりで行われた漁労活動の様子がうかがわれる。住居跡は幾重にも重なりあい、約 1500 年の間、縄文人は断続的にこの地を訪れ生活の痕跡を残した。（長野県埋蔵文化財センター　黒岩 隆）

天竜川によって両側を削られた微高地上に残る縄文時代の集落跡

竪穴住居跡から出土した石錘

最新調査成果から4

住居の隅に集めて置いた土器　長野市　県町遺跡

弥生時代中期住居跡隅の土器出土状況

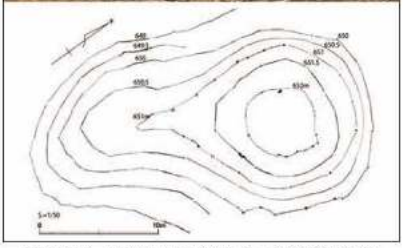
床面の土器・炭化材

県町遺跡は、弥生時代中期、奈良・平安時代の集落遺跡である。弥生中期の住居跡１軒では、炭化材と土器が広がる床面の隅から、土器が10個体まとまって出土した。器種は壺９個・甕１個で、立てたり横に寝かせた状態で交互に隙間なく置かれていた。土器の中からは少量ながらイネ科やマメ科などの種実が確認された。意図的に土器を集めて置いた状況がうかがえる、数少ない事例として注目される。（長野市埋蔵文化財センター　遠藤 恵実子）

最新調査成果から5

上伊那２例目の前方後円墳か？　伊那市 老松場古墳群

東春近小学校
児童による測量の様子



東から見た一号墳（上）と小学生によって作られた測量図

『伊那市史』によると、老松場古墳群は７基の古墳からなり、一号墳は全長約30ｍの双円墳で、この近辺では最大とされている。この古墳群を、地域住民と東春近小学校児童が公園とする活動が平成27年から始まった。その中で、一号墳は前方後円墳では？と疑問を持った子ども達により、市教委の指導の下、墳丘測量が行われた。完成した図を手に現地を視察した県内研究者らも、前方後円墳又は前方後方墳の可能性が高いという見解で一致した。今後も調査を継続していきたい。

（伊那市教育委員会　濵 慎一）

1. 小諸市＝田原遺跡　11 号住居（中期後葉）

2. 千曲市屋代遺跡群　5346 号住居（中期後葉）

3. 千曲市屋代遺跡群　5325 号住居（中期末葉）

8. 小諸市＝田原遺跡　4 号住居（後期前葉）

9. 上田市八千原遺跡
C地点 9 号住居（後期前葉）

10. 佐久市平石遺跡
15 号住居（後期前葉）

4. 佐久市平石遺跡　2 号住居（中期末葉）

5. 塩尻市塩嶺寺前（中原）遺跡
3 号住居（後期初頭）

特集　長野県の敷石住居跡

（協力機関：佐久市教育委員会、上田市教育委員会、松本市教育委員会、岡谷市教育委員会、茅野市教育委員会、長野県埋蔵文化財センター）

縄文時代中期末葉から後期前半にかけて、中部・関東地方を中心に、床面に石を敷いた敷石住居が現れる。現在 1250 遺跡以上が知られ、長野県では北佐久・上田小県地域と八ヶ岳西南麓地域を中心に、146 遺跡が確認されている。敷石住居の起源は、中期後葉の住居にみられる炉辺部（写真 1）や、出入口部の理塊周囲（2）の敷石が面積を拡大し、中期末葉に出入口部が伸長することから成立する（3・4）。後期初頭から前葉には、敷石がない住居を上回る存在となる。現壁に埋めた土器に石棒を立てた例（5）、張出部と主体部の境点に石 鉢を埋め、出入口に階段を設けた例（6）など珍しいものもある。全面敷石（7・12・13）は少数で、張出部のみ（11）や、炉がある主体部に空白部がある例（9・10・15）、床を 作った掘込みの外縁に縁が巡る例（14・16）など様々な事例がある。張出部の縁が拡 大し、多量の礫を用いた列石を備えた住居も現れ（15・16）、やがて敷石住居は姿を 消す。（綿田 弘実）

15. 小諸市岩下遺跡　13 ～ 16 号住居（後期前葉）

16. 茅野市聖石遺跡　3・12・23・24 号住居跡検出状態（後期前葉）

最新調査成果から6

中世の大溝発見！　長野市　小島・柳原遺跡群

小島・柳原遺跡群は、水内坐一元神社遺跡など弥生時代から古墳時代を中心とした集落で知られる。今回の調査地点は遺跡群の南端にあたり、平安時代の竪穴住居跡10数軒等が集中していることが確認できた。この時期に小規模な集落が形成されていたと考えられる。また、区画溝の可能性がある大溝には空風輪を中心とした五輪塔が廃棄されており、近隣に中世寺院が存在した可能性が考えられる。さらに周辺からは、塔鋺形合子の蓋や銅椀など古代仏教関連遺物もみつかっている。次年度は大溝の東側を調査予定で、古代の寺院関連の遺構遺物の発見も期待される。（長野県埋蔵文化財センター　寺内 貴美子）

調査地遠景（西から）

中世の大溝
幅6m・深さ1.5m以上あり、五輪塔が20点以上出土した。
五輪塔は溝の東岸に近い方から多く出土した。

最新調査成果から7

城下町の成立から完成まで　松本市　松本城下町跡本町 第8次調査

調査地全景（東から撮影）

推定御使者宿の範囲で発見された礎石
御使者宿は町人運営の公的な休泊施設。

松本城下町は、戦国時代に小笠原貞慶によって形成されたと考えられている。本町は、内外の流通拠点として様々な品物を扱う問屋などの大店が集中していた。発掘調査では、これまで不明な点が多かった城下町成立期から，近世的な町割り完成までの変遷がうかがえた。また、絵図に描かれている御使者宿の推定場所から、礎石立ち建物跡や高級茶器、高級食材、焼塩壺など、町人屋敷では通常見られない遺構・遺物が見つかった。（松本市教育委員会　原田 健司）

珍しきもの　～石製分銅（ふんどう）長野市塩崎遺跡群出土～

長野市塩崎遺跡群で平安時代の住居跡から、長野県内では報告例がほとんどない古代の石製分銅１点が出土した。上部には紐通し用の孔が作り出され、棹秤（さおばかり）用の分銅と考えられる。棹秤は梃子（てこ）の原理を利用しており、目盛りのついた棹に分銅を下げ、釣り合いのとれる位置へ移動して計量するしくみだ。組分銅を必要とする天秤（てんびん）とは違い、一つの分銅で足りる。

出土した古代の分銅の多くは、この棹秤用で「権衡（けんこう）」と呼ばれる。分銅の素材では、銅製のものは出土例が少なく、富山県以西の北陸地方では土製のものが、新潟県や関東北部では石製のものが卓越するようだ。重量では、古代の度量衡（どりょうこう）での「一両」に当たる 40g 程度に集中している。注目すべきは、424g を計る今回の出土品が、全国でも有数の大形品である点だ。いったい何を計量したのか。その用途の解明が、平安時代の塩崎遺跡群の姿に迫る手がかりとなる。（長野県埋蔵文化財センター 風間 真起子）

出土状況

石製分銅（高さ約９cm）

掘るしん in しののい 2017　長野県埋蔵文化財センター出土品展

平成 29 年２月 18 日（土）～２月 24 日（金）に、長野県埋蔵文化財センター出土品展「掘るしん in しののい 2017」を開催します。本年度当センターは北信・中信・南信と、長野県の北から南で縄文時代遺跡を発掘しました。その資料を中心とした展示を行います。観覧無料です。詳しくは今後のホームページにご注目ください。

会　期：平成 29 年２月 18 日（土）～２月 24 日（金）
場　所：長野県埋蔵文化財センター展示室
時　間：10：00 ～ 16：00

遺跡調査報告会＆縄文トークセッション

日　時：平成 29 年２月 18 日（土）
場　所：ＪＡグリーン長野グリーンパレス３Ｆ
○遺跡調査報告会 10：30 ～ 12：00
「信州の縄文遺跡発掘速報」
　栄村ひんご遺跡　　主任調査研究員　谷　和隆
　朝日村山鳥場遺跡　調査研究員　　廣田 和穂
　飯田市川原遺跡　　調査研究員　　黒岩　隆
○トークセッション　13：30 ～ 15：00
「信越地域の縄文文化」
基調講演「北信濃の縄文文化」
　　長野県埋蔵文化財センター　綿田 弘実
トークセッション「信越地域の縄文文化」
　　パネリスト：新潟県考古学会長　寺崎 裕助氏
　　長野県立歴史館　　寺内 隆夫氏

山鳥場遺跡　縄文中期の土偶

ひんご遺跡　縄文中期土器の出土状況

考古学の窓　～石器の消滅～

2011年、日本はアナログ放送を中止し、デジタル放送に完全移行した。電波の有効活用は、放送のみならず流通や教育業界など、日本経済の活性化を見据えてのものだ。あれから5年余りが経過し、ブラウン管テレビは消滅したといっても過言ではない。今や、このツールにこだわり続ける家庭は少ないと思われる。国が総務省の施策として主導した結果、長い歴史あるツールのひとつが移行したのである。

南大原遺跡出土弥生鉄斧（長さ 7.0cm）

米づくりとともに、日本列島にもたらされた石器に、大陸系磨製石器と総称されるものがある。磨製石斧類（太型蛤刃・扁平片刃・柱状片刃）、磨製石鏃、磨製石庖丁が代表器種で、弥生時代の中期頃までに、地域的な欠落はあるものの汎列島的に出揃う。弥生中期、長野県北部には栗林式と呼ばれる箆描文や櫛描文を特徴とする土器が分布し、大陸系磨製石器を含む多量の「弥生石器」がある。「弥生石器」を構成する器種の多くは、遺跡ごとに製作・使用されたと考えられるが、大陸系磨製石器については流通した可能性が高い。ことに伐採や加工用の磨製石斧は、栗林式の限られた遺跡で集中的に製作され、時に土器文化圏を越えて、他地域まで供給されたと推定される。

弥生中期の終り頃、紀元前後に「弥生石器」は姿を消す。その背景に金属器、特に鉄器の本格的な流通を考える研究者は多く、中野市南大原遺跡竪穴住居跡 SB11 出土の栗林式期の鉄斧は、まさにその証拠となる。大陸系磨製石器の消滅は、その登場期に比べ劇的で、列島規模で進行する。鉄器は石器よりも耐久性に優れ、作業効率が高い。しかし、3万年以上続いた石器文化を、弥生社会のクニグニが一様に捨てるには、生産や経済に関わるシステムのみならず、社会システム全般に及ぶ大きな動きが日本列島に起きたように思えてならない。

（長野県埋蔵文化財センター　町田 勝則）

編集後記

今回も県内北から南、旧石器時代から近世まで、多彩な発掘調査成果が寄せられました。特に、子どもたちの瞳の輝きが見えるような紹介があった老松場古墳群。将来の考古学徒の輩出を期待してしまいます。小島・柳原遺跡群からは、古代信濃の仏教を考える上で貴重な発掘資料の報告がありました。今後も目が離せません。

長野県埋蔵文化財センターでは北・中・南信で縄文時代中・後期の遺跡を調査しましたので、敷石住居跡を特集し、代表的と思われる事例と、分布状況をご紹介しました。考古学の窓では、弥生時代中期終末、鉄器導入という経済の転換に伴う大きな歴史のうねりが、遺跡群の動きに反映されているという視点が示されました。

注目される発掘成果を寄稿していただいた皆様に、感謝いたします。（綿田・小林）

(一財)長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007　長野市篠ノ井布施高田 963-4
TEL 026-293-5926　FAX 026-293-8157
http://naganomaibun.or.jp/
印刷：奥山印刷工業株式会社
この冊子は、平成28年度地域の特色ある埋蔵文化財活用事業で作成しました。